みなさま

宮本ゆきさんから送られてきたニューヨークタイムズ記事の和訳（翻訳ソフトの DeepL による仮訳）です。ウェビナーでは、ニューヨークで軍縮教育を推進されてきたキャサリン・サリバンさんが、この記事について述べ、どれがポリネシアでどのような影響を与えたのかという質問がありました。報告者のアナイスさんによると、この記事はタヒチでは報道されなかったので、人々は知らないし、影響はなかっただろうというお返事でした。

ポリネシアのヒバクシャの状況をする上で、参考になると思います。
宮本さん、ありがとうございました。

山根和代　8.29. 2024

＊＊＊＊＊

オリンピック・サーフィンが「毒まみれ」のパラダイスにやってくる

1974 年、フランスの核実験による放射能雲が、現在パリ大会のサーフィン会場となっているタヒチのテアポオ上空を漂った。村人たちはいまだにその影響を感じている。
ハンナ・ビーチ&写真：アダム・ファーガソン

ハンナ・ビーチとアダム・ファーガソンはフランス領ポリネシアに 1 週間滞在し、オリンピックのサーフィン競技が開催される領土における核実験の影響を記録した。
2024 年 7 月 30 日

50 年前の 7 月、南太平洋の海が完璧で力強いカールを描きながらテアポオの海岸に向かって押し寄せたとき、いつものように別の波がこの小さな集落を襲った。フランスがこの遠く離れた共和国で行った核兵器実験から放出された放射線の波である。

ロニウ・トゥパナ・ポアレウは、ヤシの木とハイビスカスに囲まれたテアポオに生まれた。彼女は現在、市長として、その紺碧の波（巻きつき、泡立つ推進力のプラトニックな理想）が、地球の裏側のパリで開催される夏季オリンピックのサーフィン競技の開催地に選ばれたことを誇らしげに語る。

しかしテアポオは、その陽気な観光パンフレットの海の風景の裏に秘密を隠していた。1974 年 7 月、タヒチの上空に放射性物質で汚染された雲が不意に流れ着いた後、住民は知らなかったが、フランス軍の機密解除文書によると、タヒチで最も人口の多い島であるタヒポ島

で最も高い放射線量を記録した。

ポアレウさんのきょうだいは、当時の他の子どもたちと同様、放射性降下物の悪性影響を特に受けやすく、被曝に関連した種類のがんを発症した。他の親類もがんと診断され、村人も亡くなった。数年前、ポアレウさんは 1,500 人の村であるテアポオの家を一軒一軒訪ねた。ポアレウ女史は村長でありながら、この村の被害がどれほど大きいか知らなかった。
フランス政府は 2010 年、30 年にわたるフランス領ポリネシアでの核実験による健康被害を長年にわたって認めようとしなかったが、官僚的で事務的な手続きにもかかわらず、放射線に関連した病気の被害者を認定し、補償するプロセスを開始した。ポアレウさんの姉妹の 1 人は、いくつかのがんを患っていた。しかし、いくら公的に認められても、彼女を治すことはできなかったとポアレウさんは言う。
「オリンピックでサーフィンができることは嬉しいし、世界中の誰もがテアポオを知ることになることを誇りに思います」とポアレウさん。「でも時々、家族の苦しみを目の当たりにすると、フランスが嫌になります」。

開発と危険

サーフィンのパラダイスであると同時に癌のホットスポットでもあるテアポポの双子の現実は、西ヨーロッパとほぼ同じ面積の島々と環礁からなるフランス領ポリネシアにおける植民地主義の複雑な遺産を明らかにしている。フランス領ポリネシアは、1966 年から 1996 年まで 200 回近いフランスの核実験が行われた場所として、急速に発展した。核実験を始める前に、パリはタヒチに最初の空港と近代的な港を贈った。
核産業に従事するポリネシアの人々は、ヤシの木が茂る家を離れ、120 余りの島々の中で最大の島であるタヒチに新しく建設された集合住宅に住んだ。珊瑚礁のビーチとタヒポオの大波の話に誘われて、観光客もやってきた。

原子力の雇用の到来は、タヒチの開発につながった。
南太平洋の環礁の上空に高くそびえるキノコ雲の写真を額に入れた。
しかし、開発には危険も伴う。今年、フランスの国会議員たちは、フランス領ポリネシアの東端にある 2 つの環礁、ムルロアとファンガタウファで行われた実験の有害な影響について調査を開始した。フランスのエマニュエル・マクロン大統領は、2021 年に同領土を訪れた際、193 回の核実験について、国家がフランス領ポリネシアに「負い目」があることを認めた。
「太平洋の真ん中で核実験をしても、同じような結果にはならない。
太平洋の他の場所では、アメリカの核実験によって、現在は独立国となっているマーシャル諸島の環礁が壊滅的な被害を受けた。イギリスもその支配下で同じことをした。
「私たちだけの問題ではありません。正義は太平洋全体で必要とされているのです。」

フランス領ポリネシアでは甲状腺癌の罹患率が高いことが政府の医学研究者によって報告されているが、2021 年に設立された現地の癌研究所によれば、癌の罹患率はフランス本土のそれよりも低いとのことである。それでも多くのポリネシア人は、核実験による本当の犠牲者は過小評価されていると主張する。地元のタブーのせいで、国の医療施設に行くことなく自宅で亡くなる人もいる。ポリネシアの議員によれば、最近まで、多くのガン患者は治療のために海外に派遣されていたため、ポリネシアの患者数はカウントされていなかったという。

フランス領ポリネシアのモエタイ・ブラザーソン大統領は、家族 4 人が放射線によって誘発される病気で亡くなったと述べた。彼の祖父は、体内の放射能が土壌に溶け出すことを恐れ、鉛を敷き詰めた棺に埋葬された。
昨年秋、ブラザーソン氏は国連で演説し、核実験による被害の正式な調査と、領土の平和的な脱植民地化を訴えた。フランスからの独立を求める与党タビニ党は、1970 年代後半にフランス領ポリネシア（現地ではマオヒ・ヌイと呼ばれる）での核実験の停止を求めるという唯一の使命を持って設立された。
「政治的な見地から、核実験の問題は長い間、独立の追求と重ね合わされてきました」とブラザーソン氏は言う。「核実験は中止されたとはいえ、その結果、人々は今も死に続けている。フランス国家は責任を取る必要があります」。

タビニ党の創設者であり、フランス領ポリネシアの元大統領であるオスカー・テマル氏は、人道に対する罪でフランスを国際刑事裁判所に提訴する活動を主導した。
「私たちは核植民地主義の犠牲者です。「だからこそ、私たちは自由を手に入れることが急務なのです」。
ムルロア核実験場に最も近い有人島のひとつ、マンガレバ島の住民は、1960 年代に初めてフランス首都圏から制服姿の男たちが現れたとき、新たな建設雇用の見通しに胸を躍らせた。戦争将軍からフランス大統領になったシャルル・ド・ゴールが、20 世紀で最も重要な発明の実験場としてフランス領ポリネシアの自分たちの地域を選んだことを誇りに思っていたのだ。
現在 80 歳で白髪のジャンヌ・ププタウキは、1966 年 7 月に最初の「シャンピニオン」、つまり「キノコ」が爆発したときのことを覚えている。珊瑚礁の石灰岩でできた大聖堂のある火山島では、興奮の渦が巻き起こった。フランス軍兵士や役人も降り立った。

地元住民には、放射能から身を守るのに十分な建造物は与えられなかった。風は突然変わり、無臭、無音、目に見えない危険がマンガレバに向かって進んできた。最初に死んだのは島の馬で、ププタウキさんの家族が飼っていた 3 頭の馬もそのうちの 1 頭だった。
核爆発が続く中、マンガレバの住民は時折、壕に誘導される程度だったという。雨水を飲み、

島の土で育った野菜を食べた。地元の食べ物で体調を崩したり、ラグーンの魚が不漁になると、缶詰に頼っていたとププタウキさんは言う。近くに駐留していたフランス軍の兵士たちは、マンガレバの外から新鮮な食料を調達していた。また、厚い壁のある建物に避難することもできた。

植民地時代のアルジェリアで初めて核実験を行ったフランス政府は、アメリカの実験がそうでないことを示す証拠が出始めても、終始、爆発は安全だと主張してきた。2013 年に機密解除された軍事文書には、ポリネシアの島々における驚くべき放射線レベルが示されていた。マンガレバでは、1966 年 7 月の爆発から 2 カ月以上後の雨水の放射線量が通常の 1100 万倍であったことが、ある極秘報告書に記されている。ハオ環礁の軍事基地に駐留していたフランス兵が発病した。
甲状腺の病気は、マンガレバの住民によると、核実験以前には一度もなかったという。ププタウキさんは涙を流しながら、放射線と関係のあるガンで亡くなった家族の名前を挙げた。彼女の孫は 6 歳で脳腫瘍で亡くなった。
「今度は私の番よ」とププタウキさんは言った。彼女は手に貝殻の紐と十字架を握りしめていた。頭には花とシダのリースが乗っている。
彼女は 2 つの癌を患っている。
「私はこの島が大好きで、私の故郷です。でも、破壊されてしまった。」
癒しのプロセスは 2010 年に始まるはずだった。フランス議会は、影響を受けた軍人や民間人が核放射性降下物によって引き起こされた病気の補償を申請できるようにする法律を可決した。しかし、申請者が自分の病気が放射線被曝によるものであることを証明しなければならないという最初の条件を含む具体的な内容は、不満を募らせた。
最初の 7 年間で、申請が認められた被害者はわずか 11 人だった。様々な調整を経て、2023 年には 108 人に正式な資格が与えられたが、それでも被災者のごく一部に過ぎない。ポリネシア政府関係者は、約 1 万人が高線量の被爆を受けたと示唆しているが、外部の研究者によれば、直接影響を受けたのはおよそ 11 万人で、これは 1970 年代の人口の 90%近くにあたる。

軍が隠し事をしていないことを示すためか、3 月にはポリネシアの政治家グループが、通常は立ち入り禁止のムルロアに案内された。軍医が環礁の放射線測定値を見せたが、正常値だった。他の将校は、数百キロと推定されるプルトニウムの核廃棄物が深い井戸に安全に処理されていることを説明した。
しかし、議員たちは多くの疑問を持っていた。なぜ特定の海洋生物の放射能検査が行われないのかと。大気圏核実験から地下核実験に切り替えたことで、多くの点で安全ではあるが、核施設が部分的に崩壊の危機に瀕しているのではないか、と。
「フランス政府は何年も前から、すべてが安全だと言っていたのに、そうではなかったので

す」と、フランス国民議会のフランス領ポリネシア代表であり、ムルロアを視察した代表団の一員でもあるメレアナ・リード・アーベロさんは言う。「信頼を持つのは難しい。」
フランスがいかにして汚れた核の過去を隠してきたか。そしてそれは、フランス領ポリネシアのはるか彼方まで及んでいる。1985 年、環境保護団体グリーンピースが所有する船「レインボー・ウォーリア号」は、核実験に抗議するため太平洋を航行中、ニュージーランドのオークランドの港で爆発し、乗員乗客 1 名が死亡した。この船は次にムルロアに向かっていたが、フランス政府は結局、自国の諜報機関がこの船を爆破したことを認めた。

植民地時代の遺産

前世紀、独立のうねりは多くの国々を植民地支配から解放した。今日、アメリカ、イギリス、フランスに支配された小さな島々は、そのほとんどが大国に縛られたままである。
1946 年に国連が非自治領のリストを作成した際、第二次世界大戦に拍車をかけた帝国主義の危険性を強調しようとして、フランス領ポリネシアもそのリストに含まれていた。しかし、フランスはすぐにポリネシアの除外を要求し、独立派のタヴィニ党の働きかけにより、2013 年までポリネシアはリストに戻らなかった。昨年に至っては、フランス政府高官が国連で「フランス領ポリネシアは脱植民地化リストに含まれていない」と発言している。

独立をめぐる議論は続いている。フランス領ポリネシアの大統領であるブラザーソン氏は、自国のことを「国」と呼び、フランスの公式の場では「共和国の中の海外国」という扱いにくい呼称で呼ばれてきた。しかし、ブラザーソン氏はフランスのパスポートを持つことの利便性も認めている。独立派と呼ばれる人々が、フランスの司法、医療、教育サービスに匹敵するサービスを提供できない限り、独立の是非を問う住民投票は失敗に終わるだろう。
おそらく、主権を持つフランス領ポリネシアは、防衛と安全保障はパリが責任を持つが、その他の国家的な側面についてはパリが責任を負わないという取り決めをする日が来るかもしれない、とブラザーソン氏は言う。あるいは、太平洋のいくつかの国々とそのような協定を結んでいるアメリカが、パートナーになる可能性もある、とブラザーソン氏は言う。植民地主義が時代錯誤だとすれば、フランス語の使用はもっと時代錯誤かもしれない、とブラザーソン氏は流暢な英語で続けた。しかし、世界の海に領土を持つフランスは、世界中にその力を誇示することができる。
フランス領ポリネシアはかつて自給自足が可能で、カヌーで遠くの島々を行き来する熟練した船乗りが住んでいた。現在、フランス領ポリネシアは食料の 70%を輸入している。原子力発電所建設ブームの後、急速に都市化が進んだ結果、人口の 70%がタヒチ 1 島に住んでいる。
ポリネシアの核実験労働者とその家族を支援する地元団体で働くタマトア・テプヒアリイさんは、「ポリネシア人の多くは、特に病気の多い実験場の労働者でさえ、核の遺産について語りたがらない」と言う。ポリネシアの原発作業員やその家族を支援する地元団体で働く

タマトア・テプヒアリイは、作業員たちは自分たちの給料のおかげでエキゾチックな輸入品を買うことができる、と胸を張った。

テプヒアリイ氏は、「彼らはよく、稼いだお金でバターをたくさん食べられると言っていました。「でもね、本当に食べられるバターの量ってどのくらいなんだろう？」
多くのフランス領ポリネシア人、特に離島の人々は、核実験の危険性についてほとんど知らない。ムルロアとファンガタウファに核実験場を建設・運営したフランス軍に、フランス領ポリネシアは人口比で最も多くの若者を供給している。
テプヒアリイ氏は、「核実験の被害者への補償について話し合う必要がある。しかし、最も重要なことは、先住民の心を脱植民地化することです」と述べた。

パラダイスでのトラブル
フランスの研究者たちは、風、天候、放射線の相互作用を予測し、慎重に計算していた。しかし 1974 年 7 月 17 日、地下爆発に切り替わる前のフランス最後の大気圏内核実験によるキノコ雲は、科学者たちが予想していたほど高くは上がらなかった。高高度からの風を受けず、放射能雲はムルロアから 740 マイル離れたタヒチ島へ直接向かった。
その後何が起こったかは、機密解除されたフランス軍の文書に記されている。科学者たちはすぐに、偏西風が放射能雲をどこに向かわせたかを理解した。放射性降下物がタヒチに到達するには 2 日近くかかるが、住民はその危険性を十分に認識していなかった。
フランスの委員会が放射性降下物に関する補償を申請できるタヒチの住民を決定した際、2006 年にフランスの原子力委員会の報告書で公表されたタヒチ全土で測定された放射線量に基づき、申請資格はほとんどが島の一部に住む住民に限定された。しかし、プリンストン大学「科学とグローバル・セキュリティー・プログラム」の研究者セバスチャン・フィリップを含む調査コンソーシアムが機密扱いを解除された書類やその他の放射線データを分析したところ、報告書は島全体の放射線被曝量を大幅に最小化していたことが判明した。
2006 年の報告書を擁護する人々は、当初、国際原子力機関（IAEA）が報告書を検証したと言っていた。しかし、ポリネシアの議員や活動家は、国際機関が検証したのは報告書の方法論だけで、データではなかったことを知った。
「私は政治的な人間ではないし、長い間、核問題について語るなら独立派に違いないと思われていたので、発言したくなかったんです」と、ポリネシア人が補償官僚制度を利用するのを支援する Association 193 の副会長、レナ・ノルマンさんは言う。「しかし、人々は何が起こったのか、そしてどのように隠蔽されているのかを知る必要があるのです」。

メロディ・リホーはタヒチで育った。彼女の父親は真珠養殖業を営むため、ムルロアとファンガタウファを含む群島によく飛んでいた。2002 年、彼女が 14 歳のとき、リンパ腫と診断され、故郷に十分な施設がなかったため、治療のためにパリ郊外に送られた。リホーさんの

両親はリホーさんと一緒に来るお金を持っていたが、小児がん病棟に入院しているポリネシアの子供たちは、特に検査地に近い島から来た子供たちが多く、リホーさん一人で入院していたという。リホーさんの両親は彼らを慰めようと、南国の花を持ち込んだり、暗く寒いパリの冬にウクレレパーティーを開いたりした。
2016 年、彼女は再びリンパ腫と診断され、最初の癌とは別の癌であると医師から告げられた。彼女は核放射性降下物の被害者として公式に認められ、現在は小康状態にある。

機密解除された文書には、さらなる驚きが隠されている。ある地図によれば、タヒチ全島で最も高い放射線量を記録したのは、オリンピックのサーフィン競技が開催されるテアポオ村である。しかし、その地図が 2006 年の報告書に掲載されたときには、テアポオの数値は省略されていた。
3 月のある日、若いサーファーたちがテアポオのビーチの木陰に座っていた。強力な波が押し寄せてきた。村人たちは、オリンピックのための工事がサンゴ礁を傷つけ、この地域に定期的に降り注ぐ雨を吸収するために必要な湿地を破壊しているという苦情を聞いていた。しかし、テアポオの核の遺産は、彼らがこれまで考えたこともないものだった。それでも、若い村人たちはそれぞれ、ガンを患った家族のリストを作り始めた。そのリストは長くなった。
数日後、フランス領ポリネシアの首都パペーテの診療所に、テアポオ村のポアレウ村長が妹を訪ねた。医師はこのパターンを何度も見たことがあるという。
その後、ポアレウさんは市内のスタジアムに行った。そこでは地元の学校が伝統的な音楽と踊りの大会であるヘイヴァに出場していた。子供たちは太鼓を叩き、踊り、衣装は草や貝殻など南国の恵みで飾られていた。レイが夜を明るく照らした。それぞれの一座は物語を語り、2 つの一座はポリネシアの環礁の上にキノコ雲が立ち昇るという、もはやリビングルームの壁に飾られる美しさではない恐怖を演じた。核兵器は今や地元の語り部の伝承の一部なのだ。
ポアレウさんの妹は数週間後、放射線によるがんで亡くなった。
「世界中の金塊を集めても、私たちの補償には足りません」とポアレウさんは言った。「ここは楽園ですが、私たちの楽園は汚染されているのです」。

ジュリアン・ピトワがフランス領ポリネシアのタヒチから、オーレリアン・ブリーデンがパリから取材に協力した。

Hannah Beech は、バンコクを拠点に 25 年以上アジアを取材しているタイムズ紙記者。綿密な調査報道を得意とする。
この記事のバージョンは 2024 年 8 月 1 日付ニューヨーク版 11 面 A セクションに見出しで

掲載される。